

構造への注目——デュルケーム

社会学ではウェーバーのプロテスタンティズムの倫理と資本主義の研究がよく知られていますが、これに並ぶ先駆的なものに、デュルケームの自殺の研究があります。

デュルケームは、個人的問題と思われるような自殺は、実は社会的集合現象なのだと思われました。個人十個人十個人十……という足し算では計り知れないような、共同体の集合力（集合的無意識）や人間の社会的結合力といったものを、統計データをもとに実証し、個人が根拠でありながら個人を超えたところに存在する社会の成り立ち、すなわち構造を考えたのです。有名な「自殺論」には、その典型例が語られています。

ウェーバーがプロテスタントだったのに対してデュルケームはユダヤ教の司祭の家系出身でした。「自殺論」の中で、デュルケームはヨーロッパではプロテスタントとカトリックという二大宗派によって自殺率が異なるという統計データに着目しました。そのことから「社会的結合の強弱が個人の不安の強弱を決める」という有名な理論を打ち出しました。

統計データでは、プロテスタントの自殺率は高く、カトリックの自殺率は低く出ていました。カトリックは教会という共同体に属しています。教徒同士のつながりは、信仰を神と個人の契約であるとして個人主義的にとらえたプロテスタントよりも強いだろう、といえます。社会的結合度の弱いプロテスタントのほうが自殺率が高い、というのは、つまり、社会的な結合と自殺率の間になんらかの因

社会的結合（原因）

	低	高
不安（結果）	高	
	低	

（高根正昭「創造の方法学」）

図2-1 社会的結合と不安との関係

果関係があるのではないか、さらに、自殺率が高いということは、すなわち個人が不安や孤独感を抱えていることの現れではないか。そう考えていったのです。

つまり自殺率の高い、低いの背後には社会のあり方を説明する概念がある。それは「個人が抱える不安」だというのがデュルケームの発見でした。このことから、先の有名な理論を生み出したデュルケームは、「独身者と既婚者」、「子供のいる世帯とない世帯」という、「カトリック・プロテスタント」以外の社会的な結合の強弱においても、同じく自殺率に違いが出ることを統計データで実証し、理論を検証したのです。

「社会的結合」や「不安」はいわばデュルケームの考えたコンセプトですが、デュルケームは自らのこの「概念」の間の因果関係を説明するために、「プロテスタントとカトリック」という宗派と「自殺率」という観察可能な指標や指数を用いました。

ちなみに、デュルケームの構造への視点は、その後モースを経て、C・レヴィーストローヌにいたる構造人類学の流れにつながっていきました。

行為への注目——ウェーバー

一方、社会学の方法論を確立した点で重要な学者であるウェーバーは、デュルケームとは異なり、人々の意図や動機などの主観にもとづく行為が社会に影響をもたらすと考えました。つまり、原因となる行為の主観的意味が、一般法則を介してではなく、きわめて個別的で歴史的な関係を経て、ある結果を生ずるととらえたのです。そうやって、プロテスタントの職業労働への献身や禁欲こそが、合理的資本主義をもたらしたと主張したのです。

ただし、この方法では原因と結果の関係（因果関係）をどのようにとらえるかによって結論が異なります。日常生活の中で人々は何らかの価値観によって行動しています。彼らの判断はそれによって縛られています。こうした主観が社会に影響を与えるというウェーバーの視点はユニークなものだったといえます。しかし、原則として社会学者も社会の一員であることには違いありません。ですから、彼らもそうした価値観を共有し、研究の動機や分析には価値観が影響を与えます。社会科学が人間と社会を対象とする以上、自然科学のように完全に純粋な客観的立場などというものはありえず、何らかの形で観察者の価値判断を含んでしまいます。

そこでウェーバーは「価値自由（Wertfreiheit ヴァリユール・フリー）」という概念を打ち出しました。科学的研究を行うのであればこうした価値



値観をいったん相対化し、事実の認識や判断と、自らが下す価値判断については、とらわれなく厳しく区別しなければならぬ、と主張したのでした。

つまり、価値自由とは既存の価値観からの自由です。社会科学の視点にはかならず誤解やこじつけがつきものであり、そうした錯誤を除くための考えやコントロール可能な方法論が大切だといえます。その意味で、ウェーバーはコントの言う観察／仮説／実験／推理／検証という「実証的段階」を社会科学に適用するための、ルールを打ち立てたともいえます。

ウェーバーの価値自由には、それ以前のアダム・スミス(1723-90)やマルクスに対する批判もこめられていました。アダム・スミスは個人の利己心を越えたところに存在する「神の見えざる手」としての市場原理を明らかにしました。マルクスは史的唯物論の立場から、階級闘争の必然性を説きました。アダム・スミスとマルクスというとまるで対立する思想の持ち主ですが、両者は人間の利己心や主観性(イデオロギー)といったものを調整したり決定する客観的システムや歴史的事実が存在する、とした点で共通していました。つまり、スミスもマルクスも確実に絶対的な真理が存在する、という信念を拠り所にしていたわけです。その点をウェーバーは「価値自由」という言葉で、社会科学の分析にはなんらかの形で観察者の価値判断がかならず織り込まれてしまうこと、つまり絶対的な真理などというものはありえない、と批判したのです。

したがって、ウェーバーの主張は「知の不確実性」の主張ともいえます。彼自身、当時の現代的知のあり様を「神々の闘争」と呼んでいました。これは、絶対的知識というものは存在せず、たえず知

識は他の知識との闘争や緊張関係におかれている、ということの意味しています。

理 念 型

しかし、ただ知は不確定なものである、というだけでは何も言ったことになりません。「価値自由」という知識獲得のルール・原則を定めたウェーバーはさらに、社会科学では「絶対真理」ではなく、「理念型 (Idealtypus アイデアール・タイプ)」を構築すべきだと主張して、不確定性から一步踏み出したのです。

理念型とは、社会学者が現実を説明する方法的道具として創り上げる概念です。それはすなわち人為的に形成された仮説であり、一貫した説明のできる純粹なモデルともいえます。理念型は現実の世界にそのままでは存在していません。しかし、社会学のすべての概念はこの理念型によって示されるといつていいでしょう。ウェーバー自身の生み出した「官僚制」や「現世内禁欲」はその代表例です。支配権力の比較研究においてウェーバーが打ち出した有名な支配の三類型（カリスマ的支配、伝統的支配、合法的支配）もまた、理念型の一つといえるでしょう。

理念型は、一種の理想型ですが、現実を純粹合理的な「型」と比較してみるのが狙いだといえます。したがって、そういった観点から事柄を名づける、いわゆるタイプ分けの側面も持っています。たとえば消費者の活動特性の一部（たとえば余暇時間消費）に注目し、「教養」型、「スポーツ」型などライフスタイルを抽出します。こうしたタイプは、現実そのものでも、その記述されたものでもありま

せん。ただし、理念型は現実にあてはめてみることによって因果関係の把握や測定などの役割を担うものといえます。さらに、ウェーバーは「理念型」が人間の行動において非常に重要な意味を持つものだとらえていました。「官僚制」の例でいえば、ある人は自分は官僚制の一員である、と認識し、ウェーバーのいう官僚制の特性に自分の生活との共通性を見出すことでしよう。個人の主観に基づく行為が連関しあつて社会が形成される、すなわち「理念によって作り出された世界像はきわめてしばしば転轍機（ターンテーブル）として軌道を決定し」てきたと考へたのです。ウェーバーはこのように理念型という視点で見えざるものを見ようとした、といえます。それはプラトンのイデアの系譜に連なる概念だともいえるのです。

「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」

こうしたアプローチを資本主義の本質理解にまで高めたのがウェーバーの名著「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」でした。ウェーバーは、プロテスタントの禁欲的で儉約的な倫理観が近代資本主義の精神を形づくっているということを、詳細な検証で明らかにしていきました。それは、禁欲的な倫理観が、欲望や利己心で動いているように見える資本主義を作り上げた、と語った点で逆説的な結論でした。それは、禁欲という概念が現世利益とは対極のものととらえられているにもかかわらず、資本主義を推し進めることになったという、いわゆる「意図せざる結果」であつたのです。ウェーバーは、合理性の中に潜む非合理的なものとして、宗教が経済に与える影響を喝破したといつて

いいでしょう。それは同時に、投機的な性格よりも工業中心の産業資本主義の特徴をも結果的に言い表したといえます。

勃興期の資本主義の時代、プロテスタントに帰依したのは資本家や経営者、そして熟練労働者でした。これは宗教改革に参加したのが彼ら富裕都市民だったからで、むしろ両者の関係は歴史的な経緯としてみられていました。この当時、カトリックは非世俗的で禁欲を重んじ、現世利益を求めず、伝統的な生活を志向する人々、これに対してプロテスタントは欲望や利益を求め、経済合理的な生活を志向する、とされてきました。こうした当時の一般通念に対して、ウェーバーは疑問を呈しました。

ウェーバーは、資本家と労働者の伝統的関係の例として、出来高制賃金制の失敗について言及しています。働けば働くだけ賃金がもらえるという「能力主義制度」のもとで労働者たちが考えたのは、労働すればどれくらい報酬が得られるかでなく、これまでと同じ報酬を得て必要を充たすには、どれだけ労働しなければならぬか、でした。ここで見られるのは、単に利益を求めない、いまだ資本主義の倫理とは別のところで生きていた当時の労働者の伝統的、習慣的傾向です。そして、こうした伝統的な傾向を打ち破ったのがプロテスタントの禁欲主義だったのだ、というのがウェーバーの着目点でした。

ウェーバーの視点は、禁欲と営利が矛盾するのではなく、関係しあっている、というものでした。プロテスタントの禁欲主義が資本主義に影響を与えた、というのがウェーバーの仮説でした。しかし、こうした仮説は当時は非合理的なものでした。ウェーバーが執拗なまでに資本主義の精神を宗教倫理

と結びつけようとした背景には、彼自身、改革派プロテスタント、カルヴィニズムの流れを汲むユグノー派の敬虔な信徒である母のもとで育ったことも影響しているかもしれません。

では、プロテスタントにおける職業観念は、いかなるものだったのでしょうか。M・ルターに発する教会は「信仰のみ」「聖書のみ」の二大原理に基づき、職業は「天職（ドイツ語 *Beruf*、英語 *calling*）」という概念で示されましたが、ルターは資本主義を訴えたわけでもありませんし、むしろ営利は避けるべきものと説きました。そこでウェーバーがさらに注目したのは、ユグノー派の源流となつたカルヴィニズムでした。第二世代の宗教改革者であるJ・カルヴィンは、「ある者は救いに、ある者は滅びに予定されている」と主張しました（予定論）。この考え方は基本的には救済に向けられており、労働を救済に向かう禁欲の手段とするような、現世での積極的生き方という倫理（世俗的あるいは現世内禁欲）が形成されていったのです。

そして、プロテスタントの職業観が資本主義精神に展開されている実例としてウェーバーがあげたのが、アメリカ独立運動の父であり、印刷会社の事業主でもあつたベンジャミン・フランクリン（1706-90）でした。ウェーバーは、ホストン生まれのビュリタンであるフランクリンが信仰していたプロテスタンティズム、なかでもカルヴィン派の職業倫理に着目しました。主にテキストとして使われたのが、フランクリンが若いビジネスマン向けに書いた『アドヴァイス・トゥ・ア・ヤング・トレーズマン』という小冊子です。そこには「時間は貨幣だ」、「信用は貨幣だ」、「貨幣は繁殖し、子を生むものだ」、「支払いのよい者は他人の財布にも力を持つことができる」、「すべての取引で時間を守

		宗教 (原因)	
		プロテスタント	カトリック
資本主義の 精神 (結果)	有	×	
	無		×

(高根正昭「創造の方法学」)

図2-2 プロテスタントの倫理と資本主義の精神の関係

り法に違わぬことほど、成功するために役立つものはない」、「信用に影響を及ぼすことはどんな些細な行いでも注意しなければいけない」、「五シリングの価値ある時間を無駄遣いすれば五シリングを失い、五シリングを海に投げ捨てるのと少しも変わらない」といった、きわめて功利主義的な処世訓が述べられています。

フランクリンは、アメリカ資本主義の勃興期にあって、単に金持ちになりたいと欲深く思うことでは、貨幣を獲得することはできないのであって、勤勉、正直、時間厳守など自らの欲望を厳しく律することが貨幣獲得への近道であると言ったのです。これは単純に聞こえますが、ウェーバーによると、フランクリンの語ったことは、倫理的な内面と営利的な外面の矛盾・断絶・飛躍を含んでおり、そこに資本主義のエートス(本質)が見出されるといのです。それは、貨幣や資本の追求が卑しいものでも何でもなく、むしろ美德や義務としてとらえられていったという、「意図せざる結果」であったのです。

ウェーバーのプロテスタント論はその後、中国の儒教との対比など、数々の論争を巻き起こしました。本書では触れませんが、

ウェーバーは西洋社会内部での論証が困難だったため、資本主義の発達度と宗教的要因の強さを中国やインドと比較し、この理論の確証を行ったのでした。すなわち、中国やインドも、かつては西洋をしのぐ経済的發展をしていたにもかかわらず植民地化してしまった。それは現世的経済的な成功を積極的に評価する宗教倫理がなかったためである、という論証でした。

しかし、むしろ重要なのは、ウェーバーが、人間を外的な要因で語るだけでなく、人間の内面に焦点をあて、そこに築かれた「合理化された世界像」に注目した、ということです。そうした内面分析に始まる「理念型」の思想はその後、社会学の手法として多岐にわたって応用発展しました。それは、事象の観察→経験から仮説へ→因果関係の発見→モデル化→理念型化→理論→検証といったプロセスを経て、「知識」や「概念」といった、背後にある意味を獲得していく知の方法論として整備されていったのです。

〔2〕 現象の構造と意味を探る——フィールドワーク

フィールドワークという知の方法

もう一つ、社会学の知として忘れてならないのは「観察」の知、フィールドワークの知でしょう。

技法としてのフィールドワーク（野外調査）は、人類学だけでなく、社会学、経営学においても現場調査という場面においてきわめて重要なものです。フィールドワークは文化人類学では未開社会研究、

社会学では暴走族などのような反社会集団の研究に成果があります。

それは単に観察技法のレベルでなく、知のあり方そのものにもかかわってくるものです。たとえばフランスの人類学者、C・レヴィ・ストロースの掲げた構造主義（表層的現象の背後に隠された深層的構造を探究する）はこうした観点を代表したものだと思われまふ。文化人類学（や社会人類学）の研究法は、大きくいえば現地調査法と比較研究法からなります。フィールドワークは前者にあたり、現地調査において、異なる文化に直接参加し、現象を観察対象となる人々の視点のレベルから理解する技法といえます。それは、事物や現象の持つ意味を深層の構造のレベルから、創造的に把握していく知のあり方と行っていいでしょう。観察して、記述する——このことを探求するのがフィールドワークという知だといえます。

フィールドワークのステップ

社会調査の観察では、調査者自身が調査対象の社会や集団（日常という現場）に参加します（参与観察）。場合によっては長期間住み込み現場を観察し、調査研究する方法です。ここでは地域社会や集団組織の成員としての役割を演じながら、対象を観察・記述することが求められます。

参与観察では、まずは出会いが大きな位置を占めます。それは相性の一致といった人間関係そのものの問題です。観察対象（これはビジネスの世界でも、顧客、現場、競合などさまざまな場合があるでしょう）への有効なアクセスと関係の確立が不可欠です。ここではインフォーマント（対象集団内

の情報提供者) や集団との人間関係(ラポール)を築くことが重要になります。調査者が「住み込む」ことでは、調査対象者は観察されていることをあまり意識しなくなり、より深層の実態が把握できるといふ利点があります。ただしその一方、調査者が共同体と同化してしまうと、観察の客観性が問われることになります。

次に現場(フィールド)では、五感を駆使した体験によって暗黙知を獲得し、情報を集めることが課題となります。そこでは適切な課題設定を行い、問題が徐々に構造化されていくことが望ましいといえます。つまり現場での仮説形成です。それはしばしば、課題の設定自体が現場で変化する、ということも意味します。

ところでフィールドワークの過程では、つねにフィールドノートをつけることが求められます。それはメモからきちんとしたノート、覚書、テープレコーダへの吹き込み、などによって、その場その場で、またあるまとまりごとにストーリーを記すことだといえます。

これを発展させていってエスノグラフィ(民族誌)が書かれます。エスノグラフィは観察記述の形式です。もともと一九世紀ごろの探検家、宣教師、植民地の執政官などによって、主に未開部族の生態を記述したものにはじまり、現在では、あらゆる社会的行為の観察を記述したもの(あるいはその過程)を指すものとなっています。この段階では、観察をつうじて得られた知識・情報を構造化(つまり問題に対して答えを出す)することが求められます。

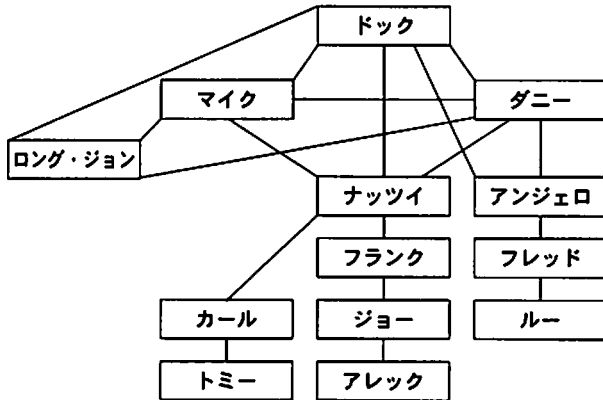
潜在的な意味構造を知る

ただし、フィールドワークにおいて重要なのはこうしたステップらしきものをしっかり追うことではなく、あくまでも事象の本質を把握しようとする事です。それには、特定の技法にとらわれず何でも取り入れる「トライアングレーション（三角測量）」あるいは「マルチメソッド（多元的方法）」といった多層的視点が求められます。それは「恥知らずの折衷主義」と自嘲的に表現されていますが、生きている知の本質を把握するために、すなわち対象とする社会や集団の生活や現象の潜在的構造を五感をつうじて感得しつつ、記述し、構造を明らかにしようとする、あくなき探求そのものといつてよいのです。それは、単なる観察でなく、人の生きている文脈ごと、暗黙知も含めて理解を深め、新しい仮説を生み出す、まさに野性の知です。そうした従来の体系的科学的的方法論とは異なる次元の方法論として、フィールドワークが評価されているといえます。そして、フィールドワークに限らず、こうした新たな知のあり方は、既存の体系的な領域にも及ぶものとなっています。

「ストリート・コーナー・ソサエティ」にみるフィールドワークの知

インフォーマントと観察者の関係、インタビュー法、調査データの整理法、何を観察すべきかのモデル化など、参与観察の原点といえる古典的名著がW・F・ホワイトの「ストリート・コーナー・ソサエティ」です。

1937年の春と夏



(ホワイト「ストリート・コーナー・ソサエティ」奥田道大ほか訳)

図 2-3 ノートン団

ハーバード大学の研究者、ホワイトは一九三〇年代後半の四年間にわたりコーナーウィル（ボストンのイタリア人スラム街ノースエンドの架空名称）のギャング団（コーナー・ボーイズ）やヤクザ、汚職政治家たちと行動をとともにし、スラム社会における「個人の行動とグループ組織の構成との相関関係」を明らかにしていきました。

当時、社会学には社会を「理解」することに主眼を置くケーススタディ派と統計学のみが「科学的である」と主張する統計派の対立がありました。しかしホワイトにとってはそうした対立は不幸であり、ケーススタディにおいても「科学的テストに耐えうるような普遍性」を獲得できることを示そうとしたのが「ストリート・コーナー・ソサエティ」だったのです。ホワイトの試みは、フィールドワークが「客観（被観察者から発信されるもの）」と主観（どのように調査者たちが、観察した

現象を解釈するか」という科学的なフレームワークにのっとったうえで、いかなる「規則性」や「理論的前進につながる洞察力」を獲得できるか、といった難問への挑戦であり冒険でした。

彼の関心は、スラム街において個人の相互行為がどのような組織化や社会関係をもたらすかを観察し、さらに観察者の彼自身が観察対象の中にとっぷりと身を浸すことで、どのような制約が生まれ、いったい何を発見することが可能かといったことと自体を観察することになりました。

ホワイトはまず、ケーススタディの中心的役割を担うことになる、コーナーヴィルのボス、ノートン街のドックに出会いました。ノートン団はドックが生みの親で、ドック、マイク、ゲニーの三人をリーダーとする集団でした。グループ内でのドックの威信は、当時流行したボーリングや女の子たちとの交際でも保たれていました。

実は、彼が中心テーマに据えた「個人の行動とグループ組織の構成との相関関係」すなわち相互行為論のアイデアは、彼がギャング団の仲間たちと半ば研究を離れてボーリングに興じている際に生まれたものでした。彼は、まったくの遊びであるボーリングのスコアが不思議とギャング団の組織の力関係と近似したものになっていることに気づきます。しかもハーバード大学出の研究者として尊敬を受け、いつの間にかギャング団のトップたちと同格の位置を占めるまでになった自分のスコアまでも、組織内に占める序列関係にほぼ等しいスコアを記録していたのです。

しかし、時が経つにつれ、グループの構造も変化していきます。ノートン団は分裂し、ドックはその地位を去ります。そしてその後にはボスになったアンジェロも、結局地位を失い、ノートン街を明け

渡すことになっていくのです。

ノートンウィルにはドックのような街頭の若者たちだけでなく、大学生のグループ（カレッジ・ボーイズ）もいました。両者は同じように若者として出世したいという気持ちを持っていましたが、カレッジ・ボーイズが他の仲間をしばりつけもしないし、仲間の学業が劣れば縁を切ることさえしたのに対して、コーナー・ボーイズでは仲間の絆がすくよく、この絆から離れることが難しかった。

ホワイトのこうした記述は、参与観察という方法では、研究者とそこに住む人々との役割をどのように調整していくかがつねに問われることを示しています。そこには以下にあげるようなフィールドワークの作法が肝要です。閉鎖的なスラム街の住人たちと友好関係を結びつつ、彼らを観察しデータ化し、しかも観察者としての自らの位置についても客観的に把握する、といった二重苦三重苦のなかでいかにアイデアや理論を構築するかについてホワイトは次のように述べています。

私たちは諸問題は真っ直ぐな線を通ると一般に考えてはならない。しばしば私たちが経験するのは、大量にこみ入ったデータに浸ってしまうことである。私たちはデータを注意ぶかく研究する、そしてこのような研究に値する論理的分析の全能をかたむけようとする。私たちはひとつか二つのアイデアが得られる。だが依然としてデータは何かまとまった形を示すわけではない。そこで私たちはデータとともに——そして人々とともに——生活を続け、遂には、データがまったく違った光を投げかけるチャンスにめぐり合うかもしれない。(略)しかし私が確信したのは、調査データの実際の証拠立ては、私たちが読む調査方法の公式の記述にそって現

れるものではないことである。アイデアは、ある程度データ潰けになり、生活する全過程のなから浮かぶものである。(ホワイト「ストリート・コーナー・ソサエティ」奥田道大ほか訳)

こうしたフィールドワークの方法は、日本では佐藤郁哉の暴走族研究などが知られています。佐藤は暴走族活動が学歴コンプレックスから生ずるといった一般的説明に反して、青少年にとつての「魅力・リスク」が動機であり、暴走に走るのは他の解決手段を持たないゆえであると考えました。さらに暴走族に対する社会のイメージがマスメディアによって再生産されていることを指摘し、それが社会問題ではなくむしろ現代の文化を反映した社会運動だと示唆したのです。また、かつて流行したKJ法も、こうした方法論のもとにある技法だといえます。KJ法は野外観察データからの仮説発見法であり、グラウンテッド・セオリー(特定領域における具体的経験にもとづいて構築された理論)につながるものです。さらにもう一点、フィールドワークのような方法について記しておくべきことは、果たしてただ一つのケーススタディで普遍的なことがいえるのか、という問いでしょう。沼上幹は「行為の経営学」で、データによる実証的研究方法の限界を示し、一般法則化よりむしろ個別事例にもとづくメカニズム解明を提言し、液晶技術革新の研究でそれを示しました。これはフィールドワークの知にも通ずるものであり、経営現象から導出された個々のシステムを経営実践に反映していくという視点は経営学の新たな地平を切り拓くものと思われま

ホワイトによるフィールドワークの作法⁽⁹⁾

○対人関係を見る

家柄や学歴といった社会的保証のないスラム街のギャング団の各メンバーの力関係は、暴力やスポーツの才能よりもむしろ街角での会話や社交術、交渉術といったコミュニケーション能力によって判断される、とホワイトは述べています。つまり、「個人の能力は、対人関係においてその人がどう振る舞うかによって判断される」傾向にあります。

○リーダーを探せ

フィールド・ワークにおいて重要なのは、内部者の中で最も熟練した観察者を探し出し、彼の助言を得ることである。ホワイトは、リーダーは、コミュニテイの中で特別な位置を占めているため、普通の人と比べて熟練した観察者になれると述べ、リーダーを探し、彼らからの助力を得ることが参与観察では重要だと述べています。またリーダー、キーパーソンの支持を得ることによって、集団内における観察者としての「私」の理解が迅速に進む点もホワイトは強調しています。

○観察者はいつ質問すべきでないかを知れ

ホワイトはスラム街のような閉鎖的空間の中で外部から暗黙知を聞き出す際には、「どんな質

問をすべきか、と同時に、いつ質問をすべきか、そしていつ質問をすべきでないかについても、学ばなければならぬ」と述べています。さらに「私がインタビューについて教わったことといえば、人びとと議論してはいけない、彼らに価値判断を下してはいけないというものだった」、「誰が」、「何を」、「なぜ」、「何時」、「どこに」といった事柄には、寛大でなくては」といった点を強調し、暗黙的な人間の社会関係についてのアプローチ法を強調しました。

○ 仲介者を探せ

先のリーダーを探せと似た教訓ですが、コーナーウィルのようなスラム界では「社会は大物 (big people) と小物 (little people) で成り立っている……そのあいだのギャップを仲介者 (intermediaries) が橋を架けて支えているということなのだ」とホワイトは語ります。仲介者こそが「個人的ヒエラルキー」といった社会的な相互作用の触媒となっているのです。

○ ペア・イベントとセット・イベント

ホワイトは人間の相互行為には「ペア・イベント」(二人の間で行われるもの)と「セット・イベント」(二人あるいは二人以上のために起こす活動)があると述べ、「セット・イベント」を起こすことができる人間はリーダーなど、個人的ヒエラルキーの上位者だけである、と理論づけただけです。

〔3〕 意味から統合へ——現象学的社会学と知識社会学

社会科学の基礎的方法論としての現象学

ウェーバー以降の社会学に大きな影響を与えたのが現象学（「ノート 現象学」（九一ページ）参照）でした。フッサールの現象学は、西田幾多郎の純粹經驗や、ジェームズが「百花繚乱の中を昆虫がぶんぶん飛び交っている状態を大規模にしたような混乱状態」と表現した多即一の世界と似たものを提示しているといえます。ただしフッサールは、西田やジェームズのように真理獲得のために純粹經驗を想定したわけではありません。あくまで意識にとつて見えるもの見えないもの、疑うべきもの、疑うことができないものを峻別し、人間の意識という、きわめて日常的な現象の根源的プロセスを明らかにしようとしたのでした。

社会学者のA・シュッツ（1899-1959）は、ウェーバーの展開した社会学の科学としての基礎づけにフッサールの現象学を結びつけたことで、とりわけ米国の戦後の社会学に大きく貢献しました。それは、文化人類学等で基礎前提として位置づけられているような他者との相互理解やコミュニケーションが、実は本当はどのようなようにして可能になるのだろうか、あるいは、それらを基礎として疑うことなしに手法として活用してよいのか、という問いにはじまっているといえます。つまり、現象学を使って社会学の分析をするのでなく、社会学の補強を現象学によって行う、ということだったのです。